

内モンゴルの民族幼稚園の現状と「人間関係」に関する課題

Current Status in Inner Mongolian Minority Kindergartens and
Challenges of “Interpersonal Relationships”
— Possibility of Introducing “Playing” into Teaching Practices —

春 蘭*, 高 木 啓**

Chun Lan Akira Takaki

Abstract

In the Inner Mongolia Autonomous Region of China, there are minority kindergartens for Mongolians besides normal kindergartens. The number of minority schools and minority kindergartens decreases as well as other autonomous regions because of Chinese policy. Therefore, there are problems such as the increase of children who can't go to minority school. Besides, educational environments of students in minority schools get worse. For example, there are many children who have to live apart from their parents, because their home is distant from minority schools. In minority kindergartens, it seems that many children can't make relationships with other children due to the change of home environments. This paper focuses on “playing”, which fills an important role in developing interpersonal relationships in kindergartens in Japan. “Playing” is considered of little significance in minority kindergartens in the Inner Mongolia Autonomous Region. Therefore, this paper argues the possibility of introducing “Playing” into teaching practices in minority kindergartens in the Inner Mongolia.

I. 内モンゴル自治区における民族教育の現状と課題

モンゴル系民族が居住しているのはモンゴル国のみではない。ロシア領内の他、本研究の対象とする中国の内モンゴル自治区にも多数のモンゴル民族が居住している。視点を変えて、中国の方から見ると、中国には実に多くの民族が住んでいるということになる。「そのなかで、大多数を占める漢族以外の人々は、少数民族と総称され（… [中略] …）国家が承認しているだけでも五五を数える少数民族が存在」¹⁾ している。

内モンゴル自治区は、広西チワン族自治区、

新疆ウイグル自治区、チベット自治区、寧夏回族自治区と並ぶ、少数民族自治区の一つである。少数民族自治区とはいえ、他の自治区同様、少数民族のみが暮らしているのではなく、むしろ彼らは、そのなかでも少数なのである。内モンゴル人口調査の2015年のデータ²⁾によると、全人口が約2511.04万人で、そのうちモンゴル族はおよそ457.77万人であり、2割にも達しない。内モンゴル自治区と言っても、漢族が多数派なのである。

民族が異なると生活様式も異なる。「それぞれの少数民族においては、おのおのの生活様式に見合った固有の風俗・習慣などが伝承され、独自の伝統文化が形成されてきた。」³⁾ 田畑久

* 千葉大学大学院教育学研究科修士課程

** 千葉大学教育学部准教授、文教大学非常勤講師

夫氏が、このように述べているように、長く遊牧民族としての歴史を持つモンゴル民族もまた、これまで移動式のゲルといった住生活、羊肉と乳製品を中心とした食生活など、独自の生活様式を確立してきた。

民族の固有性を保障するために、学校教育においても固有性が求められる。民族学校は、「民族的マイノリティの権力保障の中で、民族語の教育や言語の使用のほか、民族文化、歴史の継承を目指す民族教育」⁴⁾が行われるための学校である。

このように、自らの民族言語を使って、自らの民族文化とともに授業を行う民族学校であるが、内モンゴル自治区の民族学校も、中国の政策によって数を減らされているという問題がある。1970年代末に「ガチャ（町）」の民族学校を「ソム（市）」の民族学校に統合した。続いて、2000年には、「ソム」の学校を「ホショウ（県）」の学校へと統合している。このような状況のなかで、モンゴル民族であっても民族学校に通うことのできない子どもが増えている。

さらに、その民族学校の統廃合は、民族学校に通っている子どもに対しても、その教育環境を悪化させている。モンゴル民族の多くが住む草原は町から、最も近い距離でも車で一時間かかってしまう。民族学校が自宅から遠くなったため、親元を離れなければならなくなったからである。親から離れて暮らす子どもの多くは、祖父母とともに町で暮らすことを余儀なくされてしまったのである。このような家庭環境の変化によって、民族学校では良好な「人間関係」づくりのできない子どもが多く見られるようになっていく。

以上のような現状把握とともに、本論文では、内モンゴルの民族学校における「人間関係」に焦点を当てて考察を行う。その際、対象を民族幼稚園に限定する。というのは、コミュニケーションをする相手が制限されることで生じる人間関係面での成長課題は、幼児教育の段階から生じていると考えられ、幼児期においてこそ克

服されねばならないと考えるからである。

内モンゴル自治区における民族教育については、わが国においても数多く研究成果を見つけることができる⁵⁾。しかし、人間関係づくりに着目した研究、民族幼稚園についての研究は見つけることができない。そこで本論文では、内モンゴル民族の幼児教育における課題として、「人間関係」面での環境が貧困化していることを抽出し、その問題解決の手がかりを日本の幼児教育に求める。

Ⅱ. 内モンゴル自治区の民族幼稚園における「人間関係づくり」の現状

民族幼稚園において、人間関係はどのように育まれているのか。本章では、教育課程、実践の様子、そして教師へのアンケートの3つの側面から明らかにする。そのなかで、教育課程と実践の様子については、その特徴を浮かび上がらせるために、日本との比較とともに述べることにする。

1) 教育課程

教育課程は、民族幼稚園独自のものがつくられているわけではない。他の幼稚園と同様、中国の教育課程「幼稚園教育指導要綱」に沿って、教育がなされている。

日本の「幼稚園教育要領」が、健康・人間関係・環境・言語・表現の五領域で構成されているのと同様に、中国の「幼稚園教育指導要綱」も健康・科学・社会・言語・芸術の五領域から成り立っている。本研究の対象となる、日本における「人間関係」に対応する内容は、「自尊・自信・個性を他者（社会）との関わりを通して育てることが示されている」⁶⁾「社会」のなかに含まれている。

両国の教育課程のうち、日本の「人間関係」と中国の「社会」のそれぞれを比較したならば、多くの共通点を見つけることができるが、差異も多く見受けられる。本論文では1点のみ挙げ

ておきたい。それは、内容の表現方法である。例として、中国、「社会」領域の「内容と要求」の最初の項目を挙げよう。

子どもを様々な活動に参加するよう導き、教師や友だちとの共同生活の楽しさを体験したり子どもに自己や他者を認識させたりするよう支援し、さらに他人や社会と親しみ共同の態度を持ち最初の人間関係を構築するスキルを育てる。⁷⁾

対して、日本、「人間関係」領域の「内容」はどのように記述されているか。類似した内容を示していると考えられる項目をいくつか挙げると「先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう」、「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」、「友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ」などとなる。すなわち、日本の内容の主語が子どもの学習目標であるのに対し、中国の内容の主語が教師の教育目標となっているのである。先に、この差異を表現方法と述べたが、単に方法の問題にとどまらない。教師がつくるものと捉えるか、子どもの側から捉えるか、という視点の違いは実践にも深く影響を及ぼすと言えよう。

2) 実践の様子

内モンゴルの民族幼稚園、および日本の私立幼稚園、それぞれ一日ずつ観察を行った。それぞれ、一日の流れを以下に示す。

【内モンゴル・ビラグ民族幼稚園：2015年12月】

時刻	活動内容	気づいた点
8:00~8:20	・保護者とともに登園 ・出席をとる	・子ども同士の挨拶はない
8:20~8:50	・提灯づくり ・教師が切った葉を、教師の指示通りの場所に貼る ・指示通りの色を塗る。 ・完成した作品の上に、教師が記名する。	・子どもが自由に考えられる指導や指示がない
8:50~9:00	・トイレに行く。 ・2列に並ばせ、静かにさせ、トイレ	・トイレに行かせる時間を制限している。

	に行かせる。	
9:00~9:30	・朝ごはん ・教師が配膳し、子どもは園歌を歌う。	・量が一律のため、ご飯を残す子どもが多かった。
9:30~10:30	・ダンス ・男女交代で踊る。踊っていない間は、静かに見ておくよう指示。	・踊りの間違いに対しては、指導する。
10:30~11:00	・トイレに行く。 ・自由遊び ・外に連れて行く。 ・手洗い。	・トイレについては、朝と同様。 ・外が寒いため、遊び時間は少なかった。
11:00~11:50	・昼ごはん ・静かに座り、メニューの名称を言ってから、ご飯を食べ始める。 ・掃除	・リーダー役の子どもがスプーンを配膳。 ・メニューの名称を言うのは、モンゴル語の学習のため。
11:50~14:00	・昼寝	・静かに寝よう命令。
14:00~14:30	・起床。 ・トイレに行く。	・トイレについては朝と同様
14:30~14:45	・おやつ	・教師が果物を配膳
14:45~15:00	・詩を読む。	・班別の活動
15:00~16:00	・クラス全体で詩を読む。 ・ダンス	・ダンスは午前中のもと同じものを繰り返して踊る。
16:00~16:10	・トイレに行く。	・朝と同様。
16:10~16:30	・晩ごはん ・食べない子は静かに座っているよう指示。 ・メニューの名称を言う。	・級長の子どもが箸とスプーンを配膳
16:30~	・降園	・保護者が迎えに来る。

【日本・千葉県内幼稚園：2014年7月】

時刻	活動内容	気づいた点
8:30 ~ 10:00	・登園 ・自由遊び	・お互いに挨拶する。
10:00 ~ 10:20	・朝の会 ・先生が子どもの名前を呼び、子どもが返事をする。 ・先生と子どもは歌を歌う。	
10:20 ~ 11:00	・自由遊び	・それぞれ好きなことをして、何もしていない子どもはいなかった。
11:00 ~ 11:30	・ちぎり絵	・自分の好きな形でする。
11:30 ~ 11:50	・自由遊び	

11:50 ~	・給食	・皆並んでご飯を取る。並ばない子はいなかった。
12:20 ~ 13:40	・自由遊び	・子どもたちが自らグループを形成し、グループ全員で一緒に遊んでいた。
13:40 ~ 14:00	・帰りの会 ・先生と一緒に踊ったり、歌ったりする。	・先生と子どもが楽しく一緒に活動する。
14:00 ~	・降園	・一日楽しく過ごして、帰りたくない子どももいる。

両方の実践を観察し、様々な差異が存在することが明らかとなった。全体的には、日本の幼稚園の方に「自由」が存在していると言うことができる。例えば、両者に見られた工作の時間に典型的に表されている。内モンゴルの民族幼稚園では、提灯作りは、教師によって切られた葉を、教師によって決められた場所に貼り、また教師によって決められた色を決められた場所に塗る作業となっていた。対して、日本の幼稚園のちぎり絵は、一斉場面といえども、子どもの好きな形で行えるようになっていた。

3) 民族幼稚園の教師へのアンケート

内モンゴルの民族幼稚園の教師は、子どもたちの「人間関係」づくりに対し、どのような認識をもっているのか。前項にて分析の対象とした民族幼稚園の教師に、2016年6月にアンケート調査を行った。同園には24名の教師が在籍しているが、そのうち16名から回答を得ることができた。

設問は3つで、得られた回答は以下の通りである。いずれも自由記述で回答を得た。

問1. ビラグ民族幼稚園の子どもたちは、人間関係面で問題があると思うか。

- ある。(15名)
- 気にしたことがなかった。(1名)

問2. どのような問題があるか。

- 譲り合うことができない。(5名)
- 自分のことしか考えられない。(5名)
- 協力することができない。(4名)

-先生に報告してくることが多すぎる。(4名)

-子ども間で何か問題が起きても、自分たちだけで解決できない。(3名)

-漢民族の子どもと遊ばない。(1名)

問3. その原因は何だと思うか。

-一人っ子政策。(6名)

-祖父母と暮らして溺愛されすぎ。(4名)

-地域の問題。(3名)

-小学校に似た授業をしているから。(1名)

-モンゴル民族と漢民族とが結婚した家族だから(1名)

-よくわからない。(1名)

結果として、ほぼ全ての教師が子どもたちの人間関係面でも成長に、問題を感じていることが明らかとなった。その問題は、幼い子どもには不可避の発達課題と捉えられるものもある。しかしながら、その考えられる原因を見てみると、「人間関係が貧困な家庭環境」を問題視しているなど、本論文の1章にて抽出した問題と同様に捉えていることが明らかとなった。

Ⅲ. 「人間関係」を構築するための「遊び」

前章のように、内モンゴルの民族幼稚園をめぐる現状を捉えるならば、「人間関係」面での成長を促すために、どのような実践が考えられるだろうか。この問いに対して、本論文においては、「遊び」に着目をして、実践を開発した。

その大きな理由には、日本と内モンゴルの幼稚園の実践の様子の違いがある。一日ずつではあるが、両国の園を観察して、最も大きな差異は自由遊びの量だと考えたからである。

日本の幼稚園では、登園した後、登園した子から自由遊びをはじめ、20分間の朝の会を終えると、再び、子どもたちは自分の興味に合わせて、好きな場所で好きなことをしていた。例えば、屋外では泥いじり、滑り台やブランコ、

はしごで遊ぶなど、様々な遊びをしていた。何もしていない子は見られなかった。そのなかで、子どもたちは自らグループを形成し、グループみんなで一緒に遊んでいた。その際、教師は何もしていないようにも見えるが、そうではなくて子どもの気持ちを大事にして、子どもの中から生まれたものを生かす指導をしていると捉えることができた。教師の役割は、子どもに何かを教えようとする、何かをやらせようとするこのみならず、子どもたちが自ら考え、感性を伸ばし、好きなことに夢中になって取り組めるようにすることであり、また、それらのことこそが指導なのだと思えることができた。

他方、内モンゴルの幼稚園では、子どもの自由遊びの時間がかなり少ない。さらに、授業も教師が一方的に行っており、子ども自身の興味や関心が生かされる場面は見られない。総じて、子どもの自由な活動を中心とはしておらず、そのため、子ども同士の会話をはじめとする子ども-子ども間の関わりも少なくなっている。

日本の幼児教育においては、人間関係面での成長に、「遊び」は重要な役割を与えられてきた。例えば、瀧川光治氏は以下のように述べている。

遊びを通して幼児は、他児とのかかわりを学んでゆく。すなわち、他者の存在に気づいたり、関心を向けたりすることから、自分から他者に働きかけたり、その働きかけを受容して応答したり、逆に他者からの働きかけを受けたりする。そのように自分から働きかけたり、相手から働きかけられたりすることによって、自分とは違う存在の他者に気づき、社会的自己意識が芽生えてくる。そしてその気づき・芽生えの過程の中で、仲間とのいざこざ、仲間入りなどが起こり、自己抑制などができるようになってくる。⁸⁾

幼児は、自分自身の好きなこと、したいことを繰り返したり、広げたり深めていこうとするなかで、周囲の人・物と関わりながら、心や体を働かせて、多くの経験を重ね、自分の世界を拡

げていくのである。遊びを通して、人と関わる力、思いやり・やさしさなど、様々なものを身につけていくのである。これこそ、学びなのであり、要するに、幼児期の遊びはそれ自体が目的であり、幼児の遊びには子どもの成長や発達にとって大切な経験が多く含まれているとすることができる。

そこで、このように大きな教育的意義を内包する遊びを、「人間関係」面での成長に課題を抱えている内モンゴルの民族幼稚園において展開する可能性を本研究では追究した。まず、日本の幼稚園には遊びが多く、さらにその遊びを通して子ども同士の関わりも多いという実態を、ピラグ民族幼稚園の園長である金蓮氏に伝えた。その結果、「幼稚園でどのように子どもを遊ばせるのか。もちろん、設備が足りないの、日本と同じようには遊ばせられないが、日本の遊び方のなかで内モンゴルの民族幼稚園で行える可能性はないか教えてほしい」という回答を得た。遊ぶことに意義を認めつつも、その実施方法が分からないということがうかがえる。

この依頼に対し、日本の伝統遊びの一つである「鬼ごっこ」を教材として選択した。鬼ごっこは、日本の幼児教育の現場でも多く遊ばれており、さらに以下のような利点があると考えたからである。

第一に、運動量の確保である。日本の伝承遊びについてまとめた、かこさとし氏は次のように述べる。

各種の異名や多少のルールに変異があっても、鬼となった者が追いかけて、鬼でない者(子)が逃げるとするのが原則となっています。要するに走る、かける、にげる、のがれるという脚力・走力を中軸にした遊びということです。鬼と子のあいだで走力を競い合い、子がまさっていれば逃げおかせ、劣っていればつかまって鬼と交替するか、仲間になるという単純明快な遊びです。⁹⁾ 内モンゴルでは一年中外で遊べるわけではな

い。さらに、民族幼稚園の数の減少のため、草原から町への転居を余儀なくされた子どもにとって、運動量の確保は求められる課題である。この点で走ることを中心とした鬼ごっこは、適切な遊びと言え、さらにその単純明快さはルール等の面で遊び自体についていけない子どもを生み出さないという利点も含んでいる。

第二に、柔軟な変化の可能性である。

場所、地形、条件を問いません。平坦の、走りやすい所である必要はなく、凸凹の、起伏のある、ときにはせまい場所や障害物がある所でも、それを利用して逃げ、それを活かして追いつめることとなります。要するにどこでも広くいろいろ応用できる普遍性をもっているということです。¹⁰⁾

現地の条件によって遊び方を変えられる特質があるため、内モンゴルの民族幼稚園においても展開されることが可能であると言える。

第三に、集団的な側面をもっていることである。

鬼ごっこのように何人かで遊ぶときには、ルールや役割を理解して遊ばなければならない。このことによって、幼児なりの人間関係の理解や関係のつくり方、態度を身につけていく。¹¹⁾

鬼ごっこのなかには、助け合う必要が生じる種類もある。さらに、作戦を立て、その遂行には協力し合う必要がある種類もある。人間関係を深めるために大切な体験となりうると考えられる。

そして最後に、内モンゴルにも、名称やルールは異なるものの、類似する遊びが存在していることも挙げられる。全く未知の遊びを新たに展開するより馴染みやすいと考えられる。さらに、鬼ごっこのようなルール遊びの醍醐味は、参加者のなかでそのルールを変化させながら、遊びそのものが発展していくところにある。三点目とも関連するが、また、そのような話し合いの機会が本研究の主題である「人間関係」を構築していくと言えよう¹²⁾。類似した遊びを

経験している方が、遊びのルールを相対的に捉えることが容易になると考えられる。

IV. 今後の課題

鬼ごっこ一口に言っても、単なる追いかけっこから複雑なルールに則ったものまで多様である。永田栄一氏は44種類の鬼遊びを紹介している¹³⁾が、そのうち‘ことろ’・‘けいどろ’・‘氷鬼’・‘手つなぎ鬼’を選び、組み合わせ、2016年6月下旬から7月初旬まで6時間の実践を、ビラグ民族幼稚園で既に行った。子どもたちは意欲的に参加し、また鬼ごっこを通して、子ども間で様々に話し合ったり協力したりする姿を見ることができた。さらに、金蓮園長からは評価をいただき、同園ではその後、自由遊びの時間を増やしたという報告もいただいている。

これらのことをはじめとして一定の成果が得られたと捉えられるが、実践に対する詳細な分析・考察は、さらに検討を進め、別の機会で論じることとしたい。

【註】

- 1) 田畑久夫／金丸良子(2001)「はしがき」田畑ら『中国少数民族事典』東京堂出版、1頁。
- 2) 内モンゴル自治区政府公式サイト (http://www.nmg.gov.cn/quq/mzrk/201506/t20150615_398102.html)、2016年10月8日最終閲覧。
- 3) 田畑久夫(2001)「少数民族の自然的基盤」田畑ら、前掲書所収、9頁。
- 4) 崔淑芬(2011)「内モンゴル自治区の教育現状の一考察」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第6号、155頁。
- 5) 例えば、次の各論文が挙げられる。オドン・ゲレル(1995)「内モンゴル自治区における民族教育」研究プロジェクト報告書No.8『変革下の教育とその諸問題』亜細亜大学アジ

- ア研究所。套図格 (2013) 「内モンゴル自治区における民族教育の動向」東京・沖縄・東アジア社会教育研究会編『東アジア社会教育研究』18号。ボルジギン・ムンクバト (2013) 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族学校の実態」『千葉大学人文社会科学研究所』27号。烏力更 (2013) 「中国モンゴル民族学校とアイデンティティに関する研究」『佛教大学大学院紀要教育学研究科篇』第41号。
- 6) 高向山 (2006) 「早期多面注力の就学前教育」池田・山田編著『アジアの就学前教育』明石書店、46頁。
 - 7) 中華人民共和国教育部サイト (http://www.moe.gov.cn/srcsite/A26/s7054/200108/t20010801_166067.html)、2016年10月8日最終閲覧。
 - 8) 瀧川光治 (2002) 「ごっこ遊びにおける仲間関係－関係活動モデルを使って領域「人間関係」の教科書類を検討して見えてきたもの－」大阪教育大学幼児教育学研究室編『エデュケア』第23号、29頁。
 - 9) かこさとし (1986) 「鬼遊びと子ども」かこ・永田著『鬼遊び』青木書店、5頁。
 - 10) 同上。
 - 11) 天田邦子・近藤壽衛・天田淑江・中村敏恵・吉池由香 (1988) 「保育における鬼ごっこ遊びの考察」『児童文化研究所所報』20号、54頁。
 - 12) 集団的ルール遊びの意義については、次の論文を参照してほしい。河崎道夫・前田明・張間良子・村野井均 (1979) 「幼児におけるルール遊びの発達」『心理科学』第2巻第1号。
 - 13) 永田栄一 (1986) 「鬼遊びの実際」かこ・永田、前掲書所収、41-頁参照。

